

BOX 便り

4年間通して

4年生 赤瀬正洋

あれからもう4年。短かった。今一番そう思う。入部してから本当にいろいろなことがあった。初フライトは1年生の5月、福井空港でのフライトであった。ASK21に乗ることができるなんておまえらラッキーやな、先輩に言われ、何のことかわからずに乗りこんだ。今考えてみるとそれ以後2年間ほどプラスチックの機体に乗ることはなかった。緊張する暇もなく出発し宙に浮いた。と思ったらもうグライダーは離脱していた。景色がきれいだった。また静かだった。少し操縦させてもらったが、全く思うように動かなかった。これが初フライトの印象である。地上におりてやっとな今まで空を飛んでいたのだということがわかって感動した。この初フライトと同じくらい印象に残っているのがやはり初ソロである。2回生の夏のことである。70発を超え、もうすでに同志社で2人も初ソロに出ている。絶対同志社の同回生9人の中で自分が一番に初ソロに出てやると思っていたがその夢も破れ少しはいらだちもあった。75発目にして教官から単独飛行の許可がおりた。先輩や同輩に励まされる中、夢中で準備をして飛びたった。ウインチ曳航中は必死で何も考える余裕がなかったが、索を離脱し静かになってやっとな気づいた。これは自分が操縦しているのだと。念の為、縛帯に縛りつけられながらも後ろをふり返った。やはり教官は乗っていない。「あたりまえか」と少しにやけながら高度とポジションをチェックした。降りてきてグライダーが止まると同時に先輩が「赤瀬、初ソロおめでとう」と無線で入れてくれた。あの無線の声が今でもわすれられない。またくやしかったこともある。2回生の秋に行われた東海関西新人戦である。クラブの中で選手に選ばれたからには勝ちたい。また、同志社は、その

前2年間連続団体優勝、1年前は個人も優勝しているのである。3連覇を成しとげる為、絶対に勝たなければならない。また勝てると信じていた。しかし結果は個人8位、団体3位という成績であった。その時やはり、上には上がいる、自分はまだまだでもっと勉強すべきことがたくさんあるのだとひしひしと感じた。しかし、この教訓は4回生の東海関西競技会でも生かすことができなかった。個人、団体共に6位という成績であった。全国大会の予選には通過したとはいえ、不本意な成績だった。くやしかった。しかし2年生の新人戦はくやしきだけだったが東海関西競技会では、くやしきよりも楽しきの方が大きかった。この大会は周回が合計のべ30機ほども出るなど非常に条件がよかったのである。この大会で初めてグライダーの楽しさというものがわかった気がする。それまでは上手に飛ぶということだったが、周回競技をするにあたって頭をつかった、他の選手とのかけ引きという普段の合宿では味わえないものを楽しむことができたからである。また、オーストラリアでのフライトも普段の合宿では味わえないものを楽しむことができた。それは自分とのかけ引きである。アウトランディング覚悟で何の保証もない100kmも離れた空へつき進む。7時間も目に見えないサーマルと戦う。これこそ自分との戦いである。また高度が低くなってアウトランディングしそうだという時の緊張感はたまらなかった。オーストラリアでのグライダーは日本のグライダーとは操作の仕方は同じでもスポーツとしては全く別のものであるということがわかった。また別の楽しみというものを教えてくれた。

なにもフライトだけがこの4年間の思い出ではない。普段の田辺の活動は、時間的にはクラブの

みんなという時間が合宿よりも少ないにしてもいろいろなことがあった。トレーニング、学科、整備、いつもみんなで文句を言いつつも楽しんでやっていた。主将をすることによって、またそれまでとは違った角度からクラブというものを考えることができた。その中には事故のことや、個人の悩み、今後のクラブの流れなどもあった。また関西の学連委員会に参加することによって学連というもっと大きな視点からライダー、同志社大学体育会航空部というものを考えることができた。また委員会には他大学の主将が多く集まる為、他

大学のことを聞く機会も多く、友人もたくさんできた。ウインチマンにもなった為に自動車の知識もつき、他大学の合宿に参加する機会も多く、これも多くの友人ができたきっかけとなった。

私はクラブを一度やめようかと考えたことがあった。しかしやめなかった。なぜなら多くの友人がいたからだ。今までクラブを続けてきて本当によかったと思う。ライダーの楽しさを教えてくれたし、何よりも、多くの友人をもつことができたからである。



機体を積みこみ、さあ！
合宿に出発！！



ランウエイは無情の雪……
クローズとはたまらんナー

YOU LEARN

3年生 板谷真一郎

比較的暖かかった冬が過ぎ、まもなく春が到来する季節になりました。現在、就職活動のため企業への資料請求のハガキを書くことに追われる毎日を送っています。この資料請求のハガキにはその企業(業界)への質問・意見を書く項目があるのはもちろん、それ以外に自己PR、学生時代に力を入れたことを書く項目があります。この自己PRの欄に私は、“航空部に所属し、OB担当、合宿班長を務め云々……”と必ず書きます。なぜなら、本当に航空部に入部して様々な面で今までの人生において滅多に経験できないようなことを経験できて良かったと思っているからです。特に昨年度はとても貴重な経験をした年でありました。

昨年度は過去2年間とはかなり趣の違った年でした。というのもOB担当、しかも航空部創部60周年にあたる年のOB担当に任命されたからです。いわゆる「幹部」として1年がスタートしたのです。はっきり言って今まで私は小学校の時に班長や分団長をしたことがある程度でこのような役職とは無縁だと思っていましたので、今回1年OB担当として、その責務を務めることができるだろうか、とひどく不安でした。(正直言って当初は、創部60年目のOB担当になるとは運が悪いなあと思痴をこぼしたものでした)。そんな不安の中、1年がスタートしたのです。

春——初めてサブピストとして合宿運営に携わった春。4月から6月まで毎月合宿があり、気持ちの切り替えに苦労した春。しかし、まだ本当に真剣に合宿運営について取りくめていなかったと今となっては悔やまれる春。

夏——6月から新庄監督と共に推進していた現役部員主催の60周年記念行事を開催。

自分がチーフとなって取りくんだ初めての行事。この行事では、橋本元雄先輩、牧野鐵五郎先輩、窪田昌三先輩より当時の航空部の貴重なお話を拝聴することができ、大変意義のあるものとなりました。この場を借りて、橋本先輩、牧野先輩、窪田先輩に深く感謝いたします。また、8月合宿では初ピストを経験。4回生の原田先輩をはじめ部員全員の協力によって無事何事もなく合宿終了。そして9月。第2回現役部員主催60周年記念行事として「校祖墓参」を決行。7月、9月の60周年記念行事、そして8月合宿のピストと自分がチーフとなって取りくんだわけですが、とても精神的に疲れました。しかし、その代償に今までのだらしのない自分から脱皮できて良かったという気持ちの方が強いのです。今までの自分——クラブにおける私は、はっきり言って、ただ皆を楽しませるだけの人間でした。「この人に頼めば、大丈夫だ」という人間ではなかったのです。しかし、これらの行事をチーフとして準備をすすめていく過程において、自分がクラブを代表してこれらの行事を行わなければならないという责任感から、その他のこと、例えばクラブ運営などにも今までとは違った視点から対処できるようになりました。私はこの1年を振り返って、やはりこのような経験ができたからこそ、この1年が貴重な1年となったと言えるのではないかと

思います。

秋——いよいよ本番。同志社大学航空部創部60周年行事が田辺にて無事開催。OBの方々のグライダーに対する情熱を肌で感じとった1日。毎週、日曜日に田辺格納庫にて、ハトKやH23Cの復元作業をされていたOBの方々のグライダーに対する思いには本当に頭が下がる思いです。

このように1年を振り返ってみて、私が思うのは他のサークルでは絶対に経験できないことを航空部に入部したからこそ経験できて、本当に人生においてまさしく“学習できた年”となり良かったということなのです。

私の航空部人生も残すところあと1年となりました。今年は絶対に実現させたい夢があります。それは、昨年、幹部としてクラブ運営を支えてきた同期の2人と全国大会に出ることです。この目標に向かって今年1年、火事場の馬鹿力で頑張りたいと思います。

最近、アラニス・モリセットという女性シンガーの歌をよく聴いています。アラニス・モリセットは独特のメッセージ色の強い歌詞世界でワールドワイドに売れている歌手です。そのアラニス・モリセットの曲の中に「YOU LEARN」という曲があり、私はこの曲の歌詞が、昨年経験したことを表しているようで愛聴しています。最後に、この曲の歌詞を紹介して、この拙文を終わらせて頂きたいと思います。

I RECOMMEND STICKING FOOT IN
YOUR MOUTH AT ANYONE FEEL FREE
HOLD IT UP (TO THE RAYS)
YOU WAIT AND SEE WHEN THE SMOKE

CLEARs

YOU LIVE YOU LEARN
YOU LOVE YOU LEARN
YOU CRY YOU LEARN
YOU LOSE YOU LEARN
YOU BLEED YOU LEARN
YOU SCREAM YOU LEARN
YOU GRIEVE YOU LEARN
YOU CHOKE YOU LEARN
YOU CHOOSE YOU LEARN
YOU PRAY YOU LEARN
YOU ASK YOU LEARN
YOU LIVE YOU LEARN



校祖の墓前で

合宿と私

4年生 原 田 明

4年間を振り返ってみて一番印象深いものの大部分は合宿の中で経験してきたと思います。

航空部と言えば、やはり日常とは違った空間で仲間と時間を共にした「合宿」、「合宿」といえば航空部だと思います。

2月の最後の合宿が終わり、残すところ全国大会だけになりましたが、今では苦しかった事や嫌だった事もけっこう楽しい経験だったと思います。

私は妻沼を除いて海外にも北海道にも行かなかった「純学連産パイロット」だったのでグライダーで飛ぶということはイコール、木曾川、福井滑空場で訓練することと同じでした。

特に木曾川は回数も多かった事とその宿舎をとりまく環境(今は慣れましたが1回生の時は正直、驚きました。)で今でも印象深いですが、私自身では3回生以降のピストワークが特に印象深く、経験になりました。

1、2回生と異なり、上から合宿を見おろす立場に立つという事は「山の頂上に立って初めて眼下の眺望が見渡せる」様に1、2回生の時には先輩の言われるままにやっていた事が「ああ、そういうことか」と納得がいき新鮮であったとともに今までなかった全体をまとめる責任を負うことは航空部活動の中でグライダーに乗る事以外のやりがいを与えてくれたと思います。

初めは慣れない事もあり、全体を見るゆとりがなくグライダー発航のタイミングとかピスト変更の手違いなどでよく先輩からおこられました。今から考えると私はけっこうどんくさく、生来ずさんだったので人一倍ハマったのですが、そのことを先輩に厳しくしかられた苦い経験が後々のピストワークによくフィードバックされたと思います。

また航空部活動全体からも言える事ですが、私

は性格的にやって失敗するよりやらずにすます様な失敗を恐れる臆病な傾向をもっていたのですが、航空部での数々のハマリの経験(これだけは部の誰にも負けていない気がする。)は初めは失敗してもいいからとにかくやってみるというポジティブな考えを僕の身につけさせてくれました。

また3回生の時には気づきませんでした。4回生になり、クラブの活動を少し距離をおいて見ていると失敗やハマリの原因がよく見えてくる様になり、これらを改善してフィードバックする仕方がわかってきました。

もう4回生も残り少ないですが、まだまだ発展途上人間なので残された事があるいは現役OB(留年)としてやっていきたいと思います。

話はまたピストに戻りますが、もう1つ印象深い事はピストとして教官と訓練生の仲介に立ったことです。

たとえば教官の方は訓練と発航の効率を重要視されています。

訓練生の方もそうなのですが、今日の傾向として効率のみでなく楽しさも追求しています。

訓練生もそれぞれ大会をめざす者、自家用を目標にする者など別個の目標をもっており「楽しさ」の価値観もそれぞれ異なっています。

これらをふまえた上でそれぞれ個人に応じた発航をメイキングする必要がピストにはあります。

しかし教官、訓練生がともに望んでいる「初ソロ」、「初単座」など成果があった日はうれしく、ピスト冥利につきました。

最後になりましたが、私は大学に残るため就職は来年ですが、航空部でつちかった「楽しい」経験を実社会にいかしていきたいです。

——以上

4年間を振り返って

4年生 増田拓郎

私の航空部生活もうすぐ終わりを迎えようとしている。長いようで短かった大学生活4年間、その大部分を航空部にささげてきた私にとっては少しさびしい気持ちもあるが、今は「何かをやり遂げた」という充実感が私の心の内の大部分を占める。

大学に入学するまでの私は、何か1つのことに真剣にとりくんだことはなく、楽な方へ楽な方へと流されてゆく傾向があったように思う。もちろん今のような充実感は知らなかったし、自分という人間にいまひとつ自信が持てないでいた。そういった“自分”の性格を変えたいという思いから大学入学を機に何か1つのことに真剣に4年間とりくんでみようと考え、航空部に入部を決めたのを覚えている。

しかし、高校時代まで何事も適当にやっていた私にとって、初合宿はもちろん最初の1年間はかなりつらいものであった。朝早くの起床、機体押し、整備、学科など当時は苦痛でしかなく、加えて金銭的な理由もあり、真剣に退部を考えたときもあった。しかし、「自分を変えるため」に入部したことを考えると、ここで退部しては一生後悔するのではないかと考え直し、また航空部での生活にも徐々に慣れ、現在に至っている。

グライダーはその性格上、飛行中は1人(同乗の場合は2人)であるため、一見、個人スポーツと思われがちである。しかし、グライダー1機を上空へあげるための苦労を考えると決してそうではないと言える。様々な役目を担った多くの人々の力を結集しなければならぬことを考えると、どちらかと言えばチームスポーツであると言えるだろう。そしてそれ故に学び得ることも非常に多くあった。

それはまず第一に、自分自身の役割を最低限果たそうとする責任感が備わったことだ。“最低限”という言い方をしたのは、ただ自分の仕事だけをするというのではなく、部員同志が弱い部分や苦手な部分をお互いに補い合っていく必要があったことを意味する。

そして第二に、自分自身の視野が大きく広がったことが挙げられる。航空部というクラブではとにかくしなければならぬことが多い。合宿運営はもちろん、合宿準備、機体の整備計画、学科、機材の調達、車両の管理など挙げていけばキリがない。そういったことを優先順位をつけて1つずつ確実にこなしていく計画性、また同時に多くのことをこなしていく視野の広さを身に付けたと感じる。

そして最後に、精神的に強くなったことを挙げておく。連日の機体整備、炎天下・極寒期の合宿、様々な人達との人間模様、役職就任時の心理的プレッシャー、プライベートの時間のなさ、金銭面の苦しさなど多くの精神的、肉体的重圧に打ち勝ったという自信、また少々の失敗ならなんとかりカバリーしてこれたという自信、そして何よりも、自分自身を大きく成長させることができたという自信など様々な自信を自分自身得ることができた。このことが私の大学生活で得た一生の財産である。

私は大学生活の4年間、真剣にグライダーに打ちこんできた。そして家用操縦士の資格をとり、競技にも出場することができ、グライダーの技術は入部当初の予想以上に上達した。しかし私が航空部4年間で得た“モノ”はグライダーの技術よりもはるかに大きくそして価値のあるものであったように思う。

たった1人の1年生

2年生 水谷修平

航空部に入って1年が過ぎた。やっとR/W上で1人立ちできた同志社唯一の96年度生、水谷の今までの感想はプラス3のサーマルと、マイナス2.5の沈下帯の入り乱れている冬の木曾川のようなものである。まずは何故、マイナス2.5なのか？一口で言えば、寂しい。同回生1人だなんて、はっきり言って異常だ！そのおかげで自分は、ラジオとKa-6Eの係をやらなければならない、フライトの事にまで充分頭が回らない。おまけに昨年の同志社合宿は天候不良で充分発航が回らず、養成君(※1)だから外人参加できない自分(※2)は他大1回生に大きく水をあけられてしまった。次にプラス3のサーマルに話を移させてもらう。1つは想像どうりの世界であったということ。ASK21のラダーが重いのは気に入らないが、グライダーを地上より一次元多い空で操縦することは面白くて面白くてたまらない。次に、メリハリのある世界だということ。教官方は常にメリハリがないとおっしゃるが、それでもそこいらの大学(楽)生とは一味も二味もちがうメリハリの良さ、言いかえればたくましさを、同志社に限らず航空部部員は持っていると思う。先程、「寂しい」と書いたが、その寂しさを埋めてもあり余るほどの他大学の友人に恵まれたということ。立命館大学・名城大学・関西外国語大学等々、合宿に行く毎に友人ができて、「航空部=敬語」という自分の固定概念を見事に崩してくれた。そして、一番大きいプラスになったのは、決してお世辞ではなくて、優しい先輩に恵まれたということ。自分には3つ年上の兄がいて、兄と先輩方を重ねていたのだが、同志社に来て、1人きりだった自分に、兄のように優しく接してくれた先輩方のおかげで、変な集団に入ることもなく、楽しく過ごすことが出来た。この場を

借りて、昨年度卒業された先輩方に一言ずつお礼を申し上げさせていただきます。

赤瀬さん：いつも頼りになった先輩には、「同志社のエース」という言葉がお似合いでした。

増田さん：色々な学科をして頂いた先輩には大いに感謝しています。先輩のアドバイスを活かして、これからもフライトに励んでいきます。

櫻井さん：あの罵声が聞けなくなると思うと、少し物足りないような気がします。

神田さん：Ka-6はお任せ下さい。自分のいる限りシックスは飛び続けさせます。

西村さん：普段はお茶目(!)なのに、やる仕事はしっかりされる姿にメリハリの良さを感じました。

浜野さん：自分にはいない姉ができたような気がして、うれしかったです。

沢野さん：航空部に在籍されて2年にも満たないんですけど、ソロという目標を達成されておめでとうございます。結果を出せた先輩をうらやましく思います。

原田さん、下向さん：今年度は、空前絶後の人手不足なので、何卒、よろしくお願いします。

昨年1年だけプラスやマイナスが入り乱れたのだから、以後、どのようになるか全くわからない。しかし、自分の空への、航空部への想いは変わらないであろう。

注※1. 合宿全般について、上級生がつきっきりで養成している新入部員のことを指す部員言葉。

※2. 他大学の合宿に参加すること。